

第 35 期第 10 回研究会「メディアという視点から平和博物館をどう捉えるか」（理論研究部
会主催）終わる

日時：2016 年 12 月 17 日（土） 15:00-17:00

会場：中部大学名古屋キャンパス 8-C

問題提起者：岩間優希（中部大学）

報告者：福島在行（広島平和記念資料館）

司会：難波功士（関西学院大学）

参加者：18 名

記録執筆者：岩間優希

第二次大戦の体験者がいよいよ少なくなっている現在、「記憶の戦争」が再燃し、戦争体験継承の在り方が改めて問われている。戦争を後の時代へと伝えるメディアとしての平和博物館に着目し、今回の研究会を企画した。

冒頭に岩間から問題提起をし、これまで歴史学、平和学、教育学の観点から研究されることが主だった平和博物館のメディア的機能を強調した。その上で、時間が経過するにつれて「戦争の記憶」は何らかのモノ化するケースが多いことや（博物館展示、モニュメント、銅像、等）、新しいメディア技術（VR など）を使った展示を検証する必要性などから、平和博物館のメディア的研究の重要性が高まっていることを指摘した。

続いて報告者の福島氏から、平和博物館研究の領域で議論されてきた定義や日本平和博物館略史、研究動向などが報告された。日本では 1950 年代に広島平和記念資料館や長崎国際文化会館といった原爆に関する被害を展示する施設が開館し、60 年代には戦争体験の継承という課題が形成、70 年代には各地で出現する空襲記録運動では博物館の建設も志向された。それが 80 年代から使われ始めた「平和博物館」という言葉とともに概念化され、比較的大規模な館が成立されると同時に、平和博物館であることを自認する館の層が形成されてきたのである。

近年の研究動向としては、平和博物館の理念を巡る研究から特定の館の実践、展示内容に関する分析などの他、関連領域として戦争展示、語り継ぎ、記憶論、人権博物館、戦跡などについての研究も併せて紹介された。報告では、「平和博物館」と「博物館における戦争展示一般」とが異なるものであることも強調された。少なくとも日本においては、平和博物館は単なる戦争の展示ではなく、戦後日本社会における課題としての 15 年戦争批判と、それを土台とした平和への志向を含みこんだものである。これが、戦争や兵士の賛美につながる博物館と区別される部分である。しかし情報の送り手（平和博物館関係者）と受け手（来館者）の価値判断や認識は一樣ではあり得ない。こうした点について質疑応答の際に盛んな議論がなされたことは非常に有意義であった。他にも、デジタル・アーカイブの意義や、学芸員の意識、VR 技術などについても議論が広がり、実り多い研究会となった。